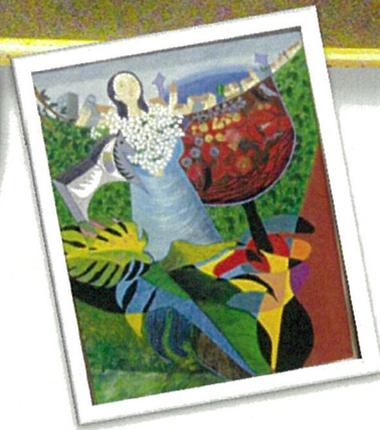


発行：小田原市文化政策課 文化情報紙ワークショップ 直井千佳／協力・撮影 芹澤，本多

受賞者が決定
西相展



感動したい
伝えたい

市民による市民のための文化とアートの情報紙

平成 28 年 小田原文化会館が新しく生まれ変わります！
小田原の魅力をも市民の目でお届けします。

西相美術協会

第77回 西相展

作品 226 点が集結 高校生の作品 75 点

小田原市民会館がまるごと美術館

大正時代から続く西相展 22 作品の受賞が決定



地元の人に作品を観てもらいたい
若者に展示の場を提供したい

小田原を中心とした芸術家たちの作品展が10月10日から14日までの5日、西相美術協会の公募美術展として小田原市民会館で披露された。

今年で77回を迎え、作品は226点におよび、洋画、日本画、彫刻の部門に分かれ、高校生の作品も75点が並ぶ。10月14日には授賞式が行われ、22作品が選ばれた。

「展示する場を自分たちの手で作りたい」と語るのは西相美術協会副会長の齊藤四郎さん。

個々に全国の美術協会に所属し、全国の展覧会にも出品している。作品は量一量を超える大作が多いのが、会場の広さを考慮し、厳選された一人一点の作品が並んだ。

県内の高校11校から作品75点



西相美術協会の歴史

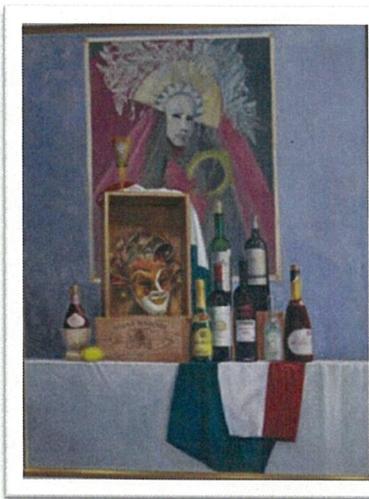
西相美術協会は、今から60年前の昭和27年に発足。相州美術会と小田原美術協会の合併に伴い、西相美術協会となる。相州美術協会としては、関東大震災の翌年の大正13年から活動が始まり、展覧会には大正期の代表画家、萬鉄五郎、文化勲章授与の坂本繁二郎の作品が並び、幕をあげた。展覧会（公募展）は第2次世界大戦の戦時、戦後などの一時期を除き毎年開催され、今年で77回を迎えた。

芸術家自らの会場づくり

西相美術協会は、20代から80代の89名で活動している。今回の展覧会の設置、目録、審査もすべて芸術家自ら行った。創立当初から、陳列壁面用の幕は小田原中の備品を借り、壁画を作る材木は大八車で運び、カナヅチを握り壁画を作っていた歴史がある。

参考 西相美術協会 各団体のあゆみ

第77回 西相展受賞者



協会長賞「思い出」加藤油余

イタリア旅行の思い出を一枚の絵に

- ・市長賞 「崖上の街」 小林敏子
- ・市議会賞 「海士」 加藤 壽
- ・教育賞 「遠くからの声」 安藤ニキ
- 「旅・追想」 高田 稔 「初秋」 中野純子
- ・市文連賞 「牛骨のある静物」 相原俊幸
- ・奨励賞 「嬉しかった贈り物」 古川和美
- 「うしろすがた」 中村さやか
- 「夢の架橋」 西垣雅子
- 「狩川緑の風」 青木健夫

- ・スポンサー賞
- 「遠い記憶」 中川知絵子(東美賞)
- 「光求めて」 片岡耕雲(角田ガクブチ店賞)
- 「BOUTIQUE」 矢澤省三(いのうえ画材店賞)
- 「赤い水平線」 千葉美保子(飛鳥画廊賞)
- 「初秋」 保坂美佐恵 (アオキ画廊賞)
- 「出港」 丸岡久美子 (アートポエム賞)



電車の中でみる 動く児童画展



今年もやってきました！



10月5日(土)15日の11日、伊豆箱根鉄道の大雄山線の電車が「動く児童画展」として走りまわりました。沿線児童の絵画教育の一助として

【小田原市民憲章】

～先人が残した日常の幸せを詠む～

わたくしたちは、黒潮おどる相模灘にのぞみ、梅の香におう天守閣をあおぐ「小田原」の市民です。

わたくしたちは、先人の残した文化を誇りにし、西湘の近代都市としての限らない発展に願いをこめて、ここに市民憲章を定めます。

- 一 健康で明るい生活を大事にし、豊かな心をそだてましょう。
- 一 元気で働くことを喜び、しあわせな家庭をきずきましょう。
- 一 隣人と仲良くし、だれにもやさしく親切にしましょう。
- 一 きまりを守り、力をあわせ、住みよいまちをつくりましょう。
- 一 緑と水を大切に、平和な明日の繁栄につとめましょう。

始められた児童画展は今年で38回目。沿線8校の小学生の作品75点が車内に展示され、県内外からの乗客の他、全国の鉄道ファンを楽しませてくれました。

「白と黒の世界に色をみる」は、黒と白の対比が、見るたびに色を感じ、異なる思い描いた色が見えてくる。一点画を得意とする西相美術協会副会長の藤さんに、素敵なお話を伺いました。

白と黒の世界に色

をみる

「写真は一番美しい。白黒写真がどの写真も色が一番きれいに見える。見えてくる」。見えないはずの色が、白黒写真を見ると不思議と見えてきます。「白黒で書いた作品は、見るたびに色を感じ、異なる思い描いた色が見えてくる。一点画を得意とする西相美術協会副会長の藤さんに、素敵なお話を伺いました。」

赤ちゃんに たくさんのお色を



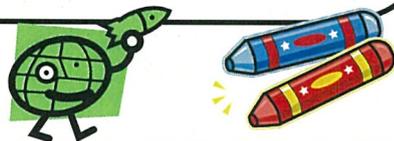
育児雑誌に「赤ちゃんを美術館に連れて行く」との記事がありました。生後6か月を過ぎた頃から、見える色がはっきりする一方で、美術館で見たことのない形や色を見せてあげると喜ぶと書かれています。箱根の美術館までは遠いと思っていましたが、小田原市民会館での西相展が行くことができ、親子でビーチボールに描かれた高校生の立体の絵に、息子は興味津々で手を伸ばしていました。

子どもと一緒に 美術館に行こう！

し、体全体で刺激を受けていました。西相展のお蔭で、芸術の秋を親子で楽しめました。

見たことのない色と形を子どもたちへ

高校生のカラフルな作品に興味津々



■今回受講したワークショップは、小田原市民会館の新設に向け、市民の目線で小田原の魅力を伝えるための講習会でした。講習会場は現在の市民会館であり、毎週のように美術展、生け花展、コンサートが行われている事を知り、刺激を受けました。これからも小田原の魅力を探し続け、自分の言葉で伝えていきたいです。直井千佳

■もっと愛される市民会館へ。拘りを持つ事で作家の個性が花開く。取材する者も受ける側も真剣勝負。感性研ぎ澄ませて臨みたい。市民会館では、様々な催し物が今日も開かれています。受け取るばかりでなく、自ら楽しみ親しんでいこうという関わり方を、紙面を通して伝えたい。市民会館の臨場感を作るのは、そこに集う人々、私たち。

本多和子

編集後記

■情報紙一回目の発行に際し、始めての経験の中様々な事を学び、今回の西相展を皮切りにアートという芸術の世界を経験出来た事を感謝する。若手編集者のパワーに圧倒されアートのしずくの完成を見て感心させられ、更なる発展を期待します。

発行：小田原市 文化政策課 文化情報紙 ワークショップ 直井千佳/協力・撮影 芹澤, 本多

第77回西相展 市議会議長賞受賞作品

あ ま 「海士」

母親は、息子のために命をかけた

海で供養していた息子の前に、竜女として海から現れた母親。そして母親は息子の成長を見届けて、天に舞いながら成仏してゆく。



受賞者インタビュー

加藤壽さん

能の舞台を思い描き続け作品はうまれた

「能の『海士』に感動し、思い描きながら一刀、一刀と手彫りした。」満面の笑みで語るのは、木彫りを始めて8年の加藤さん。「木は彫ってみないと、ふしや木目がどうなっているかわからない、顔を大切にしながら半年かけて彫った」。1本の木をくり貫き、寝室を作業場にして作製。加藤さんの手により小田原で見つけた、くすの木が頭上にある竜の力強さ、母の温かさ、着物の質感を出し、木の魅力を引き出していました。

市民記者としてインタビュー

作品をみて素晴らしいと思った時に、偶然にも加藤さんにお会いすることができました。思わず「加藤さんの作品から能が観たくなった」と伝え、温かくインタビューに答えてくれました。

西相展では芸術家のトークショーが行われ、身近にすむ芸術家と直接触れあう事ができるのも、魅力の一つでした。

人は何かに感動して ものをつくりだす